

深い学びの実現に向けて

— つなぐことで駆動する知識 —

福井県小学校長会

会長 松宮 龍 栄



新しい学習指導要領の改訂が進んでいます。その中心テーマは、「多様な子どもたちの深い学びを確かなものにする」とです。これは現行の学習指導要領とも密接に関連しており、日々の授業や学校経営に直結する重要な課題です。中央教育審議会でも活発な議論が進められており、私たち校長には、これらの方向性を日々の学校経営や授業づくりに結びつけていくことが求められています。

さて、文部科学省初等中等教育局主任視学官・田村学氏は全連小福岡大会の講話で、深い学びの実現に向けたキーワードとして「つなぐ (connect)」「駆動する (drive)」「精緻化 (エラボレーション)」の三つを挙げています。深い学びとは、個々の知識が関連し、つながり、ネットワーク化することで、より高次の概念として統合されていくプロセスです。ある小学校の事例では、子どもたちが対話を重ねる中で、児童の発言の質が次第に高まっていく様子が見られました。他者の発言が自分の知識と結びつくことで理解が深まり、発言の質が向上していく -- この「精緻化」こそが、深い学びの本質です。知識が単なる情報からつながり、ネットワーク化することで「自らを動かす力」となるような構造を築くことが、私たちの目指す姿です。そのためには、授業におけるアウトプットの質と量を高めることが不可欠です。確かな知識の土台を築いたうえで、話す・書く活動を充実させ、思考を言語化する機会を意図的に設けることで、学びは一層深まります。さらに、一人一台端末は、深い学びを実現する強力なツールとなり得ます。豊かな情報へのアクセス、他者の考えとの比較、自分の考えの可視化など、デジタルは圧倒的なアウトプットの機会を提供することができ

ます。実際、主体的・対話的で深い学びとICT活用を掛け合わせた学校では、子どもたちの力が確実に伸びています。

また、探究的な学びも重要です。獲得した情報を活用しながら自分で問いを立て、答えを探す学びは、国内外の研究でも効果が示されています。総合的な学習の時間を核に、教科を横断した学びを設計することが、これからの学校に求められています。

校長先生方には、こうした最新の教育動向を踏まえ、学校経営や授業改善に向けた議論を深めていただきたいと思います。特に、深い学びの実現に向けたアウトプット重視の考え方や、デジタルツールの活用、探究学習の充実は、学校現場の実践と強く結びつく内容です。子どもたちの未来を拓くために、私たちが今できる挑戦を共に進めていきたいと思っています。

令和8年10月には「東海・北陸地区連合小学校長会教育研究福井大会」が福井市で開催されます。校長の学びの姿は、教職員や子どもたちの学びの相似形であり、ロールモデルです。この福井大会が、各県の校長先生方にとっても「深い学びを実現する」貴重な機会となることを確信しています。

最後になりましたが「會報」の発行に際し、ご協力いただいた関係各位、並びに編集広報委員の皆様から感謝申し上げます。ありがとうございました。

第77回福井県小学校長教育研究南越大会

教育長挨拶概要

福井県教育委員会

教育長 藤丸伸和



第77回福井県小学校長教育研究南越大会がこうして盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。本日お集まりの小学校校長会の皆様方には、日頃より子どもたちの健全育成に多大なるご尽力を賜り、誠にありがとうございます。この場をお借りして、心からお礼を申し上げます。また、本日の研究大会の開催にあたりまして、松宮会長をはじめとする校長会の皆様、そして地元の越前市、池田町、南越前町の皆様方には多大なるご協力をいただき、重ねてお礼申し上げます。

さて、今年度の大会主題は、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」と伺っております。この大会主題にもあるように変化が大きく先の見えにくい時代だからこそ、子どもたちは、知識だけでなく他者と協力しながら課題を解決していく力、主体的に「地域の未来」や「自らの将来」を考え、人生100年時代を生き抜いていく力を身につけることが必要になります。

私はその第一歩として、これまでも各学校で取り組まれている「ポジティブ教育」を全県的に推進していきたいと考えています。ポジティブ教育とは、ご存知のとおり、子どもたち一人ひとりの強みや良さに着目し、自己肯定感を高めながら学力や社会性を伸ばしていく教育であります。子どもたちが「やればできる」「自分は大切な存在だ」と実感できることが、挑戦する意欲や他者への思いやりにつながると考えております。

先日、私自身が県教育総合研究所を訪問し、ポジティブ教育について学ぶ機会を得ました。その中で、「心からだしあわせな人生をつくる5大栄養素」として、「勇氣」「感謝」「ゆるし」「思いやり」「よろこび」の5つがあることを学びました。特に私の心に強く残ったのは「ゆるし」という言葉です。「ゆるし」というのは、「他の人や自分に嫌な気持ちを持ち続けることをストップし、そのエネルギーを良い方向に向ける」ことです。最近はSNS等の影響もあり、他者への攻撃や非難がエスカレートする傾向があります。社会には多様な人がいて、考え方も様々です。多様な考え方や立場をお互いに認め合う寛容性の高い社会を創っていくことがますます必要だと考えております。また、自分へのネガティブな感情や考えを早めに切り替えることは、自分自身を楽にし、前に進む力を生み出します。こうした心の力を育むことは、子どもたちが人生を前向きに生きる力を養うとともに、問題となっているいじめや不登校の予防にもつながるのではないかと考えております。

県教育総合研究所では、「福井県版ポジティブ教育プログラム」を策定し、「ソーシャルスキル教育」「ピア・サポート活動」「レジリエンス教育」の3本柱で具体的な実践プログラムを提供しています。すでに実践されている研究指定地域においては、「学校に行くのは楽しいと思う」「友達関係に満足している」「困りごとや不安がある時に先生や大人にいつでも相談できる」と回答した小学生の割合が県平均値を上回るなどの成果も出ています。市町教育長会議でも、このポジティブ教育の推進を呼びかけております。ふくいの未来を創る子どもたちのため、ぜひ各学校において積極的な取り組みをお願いいたします。

この「ポジティブ教育」による「自他を認める心」を基礎に、クラスや学校の良さを見つける取り組みへと進めていただき、そして範囲をさらに広げ、地域の良いところや先人の生き方を学ぶ「ふるさと教育」につなげていただきたいと思います。中学・高校では、ふるさと教育をもとに、地域や社会の課題解決策を考える「探究学習」へと発展させています。こうして、児童生徒の発達段階に応じて、少しずつ視野を広げていながら、最終的には、地域政策や県の将来構想についても学び、地域の未来と自分の生き方を重ね合わせる「ライフデザイン教育」へと結び付けていくことが重要だと考えています。「ポジティブ教育」と「ふるさと教育」、そして「ライフデザイン教育」は決してバラバラの概念ではなく、一体的に進めていきたいと考えております。現在の各学校での取り組みを俯瞰し、地域の小中高のさらなる連携強化を図り、引き続き積極的に進めていただくことをお願い申し上げます。

本大会の副題「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」を目指して、本日の8つの分科会が、皆様にとって新たな学びと気づきのある実り多い時間となることを祈念しております。

結びに、本研究大会のご盛会、ならびに福井県小学校長会の益々のご発展と、本日お集りの皆様方のさらなるご活躍とご健勝を祈念して、祝辞といたします。本日は誠に改めてありがとうございます。



時流潮流

ようこそ、「あさみゆー」へ!



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

館長 湯川 直

1 一乗谷朝倉氏遺跡（以下「遺跡」と言います。）とは？

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館（愛称：あさみゆー。以下「当館」と言います。）の紹介の前に、改めて遺跡の概要をお伝えします。

一乗谷は、戦国時代に朝倉氏が5代、約100年に渡って越前一国を治めた城下町です。元龜争乱で織田軍に滅ぼされた後、城下町跡は田畑に埋まり、約400年間その姿を地中に留めていました。

- ・1967年 発掘調査開始
- ・1971年 城下町跡や一乗谷城など約278haが国の特別史跡に指定
- ・1991年 遺跡内の4庭園が国の特別名勝に指定
- ・2007年 出土遺物のうち約2,300点が国の重要文化財に指定

特別史跡、特別名勝、重要文化財の3つの国指定を受けている例は、平城宮跡など、一乗谷以外に全国で5か所あります。

2 当館開館に至る経緯

1972年 福井県が地方自治体としては全国で初めて、文化財の研究員を擁する「県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所」を設立しました。

1981年 同研究所を改組し「県立朝倉氏遺跡資料館」が開館、調査研究成果の展示もご覧いただける施設となりました。その後「県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館」と地名を掲げ、資料館は約40年に渡り一乗谷の調査研究と展示の拠点となりました。

北陸新幹線県内開業後の誘客や、これまでの発掘による遺物の収蔵場所の確保など様々な観点から、2020年1月に新しい博物館の建設が始まりました。約2年後の2022年1月に建屋が完成。内装工事や展示準備を経て、同年10月1日に当館が開館しました。

3 当館の施設概要

(1) 施設

「本館」の敷地面積は9,157㎡、延床面積は5,257㎡です。旧資料館は現在も図書室や講堂等を有した「分館」として活用



本館

しており、敷地面積は7,262㎡、延面積は3,442㎡です。



分館

(2) 展示

展示施設の「推し」を3つ紹介します。

ア「石敷遺構」（本館1階）

当館建設時に出土した石敷をそのまま屋内展示に取り入れたものです。この遺構が何だったのかについては、船着場あるいは寺院（経堂）へ至る参道、の2説があります。



石敷遺構

イ「城下町ジオラマ」（本館2階）

50軒以上の町屋に多様な職人や商人の暮らしが垣間見え、寺院や武家屋敷も立ち並び、巨大なジオラマです。調査結果をもとにリアルに再現された町並は圧巻です。



城下町ジオラマ

ウ「朝倉館原寸再現」（本館2階）

後に室町幕府最後の将軍となる足利義昭のお成りを迎え、一乗谷が最も繁栄した時期の朝倉館を再現しています。この原寸再現をご覧いただき館のイメージを持たれたあと、遺跡の館跡と見比べていただくのがお勧めです。



朝倉館原寸再現

4 博物館職員の概要 ※内容は執筆時点のものです。

(1) 調査研究

朝倉一族の繁栄は15～16世紀の約100年、場所も一乗谷という地域に限られますが、そこは研究材料の宝庫です。調査研究担当副館長以下、下記のように多様な専門分野を持つ文化財調査員(以下、「調査員」と言います。)と学芸員、計15名が業務に当たっています。

[順不同]

・考古学

特別史跡の地下に眠る遺構や遺物を発掘調査、研究

・庭園、造園

特別名勝4庭園を含む遺跡全体の整備、研究

・文献

古文書等から朝倉氏や一乗谷、中世の越前等について研究

・美術工芸

遺跡出土品を含めた様々な美術工芸品の研究

・建築史

朝倉館跡をはじめとする当時の様々な建築物の研究

・保存科学

露出展示している遺構や出土遺物の劣化防止等の研究

それぞれが協力・連携して、一乗谷の総合的な調査研究にあたっています。また、それらの調査研究に助言・指導を行う特別館長(非常勤)がおり、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の小野正敏名誉教授が就任しています。

また、調査員・学芸員の指示のもと、出土した遺物の洗浄・実測・復元といった作業や、テーマに沿った資料収集・整理などの業務を行う「整理事業員」が、約40名在籍しています。この職員の基礎的な作業により、調査員・学芸員がスムーズに調査研究を行うことができます。「縁の下の力持ち」として普段は表舞台に立つことはありませんが、当館にとってなくてはならない存在です。

(2) 館運営、広報、教育普及ほか

事務担当副館長以下、「利用サービス室」の事務職員6名が、調査研究以外の当館運営に欠かせない業務に当たっています。施設の維持管理、観覧料収納や支払いなどの財務、団体客などの予約受付、誘客のための広報など多岐に渡ります。警備や館内アテンダント、清掃等は専門の事業者へ委託して、また、展示ガイドは知見を有する団体をお願いして行っています。

教育普及に関しては、県内の小学校長を経験した人材を「歴史教育専門員」として配置し、主に学校からの児童・生徒の来館に対応しています。県内の学校や教委などを順次訪問し、当館を校外学習の場に利用してもらえるよう周知説明にも取り組んでいます。ちな

みに、県内の学校の学習利用に際しては、観覧料や施設利用料を免除しています。教職員研修会での解説や学校への出前授業、個人向けの自由研究講座などを開催することもありますので、ぜひご活用ください。

※本項目記載の業務区分は主担当を指しており、研究職・事務職が相互に連携、補完して行う作業も多くあります。

5 当館や展覧会の広報・PR

※内容は執筆時点のものです。

私は行政職ですので、残念ながら調査研究分野に関する業務をこなすことはできません。「できることはPR!」と自身に言い聞かせ、広報担当者と協力して誘客活動にも取り組んでいます。

(1) 県内外メディアへの出向宣伝

種類や規模によって、「トピック展」「テーマ展」「特別展」などと呼び名は異なりますが、基本展示(常設展)ではない期間限定の展覧会開催にあたり、県内メディアを訪問してPRします。中でも規模が大きく観覧に特別料金をいただく「特別展」開催の際には、東京・大阪・名古屋の3大都市圏にも出向いて、現地メディアにPRします。これらは、報道を通じて当館自体や展覧会を認知してもらい、来館へとつなげる狙いがあります。

(2) 観光商談会への参加

福井県観光連盟が3大都市圏で開催する「観光商談会」へ参加しています。主な相手方は旅行会社で、当館の概要を説明し売り込みます。団体ツアーへの組み込みを図るとともに、旅行先を検討している個人客へ当館を推薦してもらうことが目的です。

(3) 広報キャラバン事業(事業者委託により実施)

(1)(2)がメディアや旅行社といった事業者へのPRであるのに対し、この事業は来館者となる個人の方に直接訴えるものです。今年度は県外10か所のイベント会場や商業施設において、来場者を対象にPRを行っています。3大都市圏のほか、北陸新幹線県内開業によって乗換えなしで来県が可能となり、心理的な距離が近くなったとも言える大宮、高崎、長野などの地域も含まれます。

(4) 出版物への掲載や番組制作への協力

遺跡や朝倉一族などをテーマにしたテレビ番組や出版物の制作に際し、当館への取材依頼も増えています。番組収録では館内への機材持込みが伴いますので、来館者の観覧に支障がないよう気を配ります。出版物の場合は、来館取材への対応のほか、依頼を受けて学術面の表現確認なども行います。いずれの場合も、取材者の依頼に応じて当館所蔵の資料画像や映像を提供することがあります。

(5) ホームページ、SNS

当館は、専用ホームページのほか、Instagram、X（旧Twitter）、facebookの各SNSを開設しています。SNSでは、展覧会やイベントの告知、それらの開催中の様子など、比較的最近の情報を発信しています。加えて本館併設のカフェ「CARAMON」（唐門）のメニューや、ミュージアムショップの商品情報を投稿するなど、閲覧者の来館意欲を高めるような素材の発信に努めています。

(6) 当館公式マスコットキャラクター

シシカゲ&おコマ

【シシカゲ】

遺跡で出土した獅子の形をした目貫（刀の金具）をモチーフにしたものです。朝倉氏歴代当主が「○景」の名を受け継いだことが名前の由来です。色は目貫の金（黄色）です。

【おコマ】

遺跡で出土している笏谷石製の狛犬がモデルです。色は笏谷ブルー（薄い青緑）です。

この2体は、二次元では並んで活動することが多いのですが、三次元の活動はシシカゲが一手に引き受けています。館内でお客様を出迎えたり、県内外

の出向宣伝に出張したりしています。イメージキャラクターでもあり、当館SNSに「シシカゲ日記」「シシカゲ出動記録」というレギュラーコーナーを持っています。

昨年（2025）9月には、高円宮妃久子さまが当館をご視察になられました。お帰り際にシシカゲがお見送りに外に出たところ、これに気付かれた久子さまがお車から降りて駆け寄られ、満面の笑みでシシカゲとの写真に収まっていらっしゃいました。

6 結びに

当館は、昨年（2025）8月中旬に2022年10月の開館以来、累計50万人のお客様を迎えることができました。これまでにご来館いただいた全ての皆様に感謝申し上げます。これからも日本国内外あらゆる地域・年齢層の方にお越しいただきたいと考えているほか、県内の方々にも何度でも足を運んでもらえる博物館を目指しています。このために、館員一丸となって努力と工夫を重ねてまいりたいと存じます。

教育機関の皆様におかれましても、当館へのご意見ご要望などございましたら、私、湯川まで遠慮なくお寄せください。引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。



公式マスコットキャラクター シシカゲ&おコマ

退職校長の言葉

役職定年を迎えて

〈福井市〉河合小学校長
森 嶋 正 樹

教職に就いてあっという間に役職定年を迎える年になりました。校長として、学校や子供たち、教職員を管理する立場になり、教育課程の遂行や教職員の不祥事など、学校経営全般において常に気を張りながら生活しています。一昔前から比べると教員の置かれる環境や教員の考え方は大きく変化したと感ずることがあります。

私が大学を卒業した頃は、バブル期絶頂でした。就職先を悩みながら、教育学部に在籍していたのでとりあえず教員採用試験を受験し、中学校に採用されました。しかしながら、当時は、非常に指導が困難な時代で、向いていないなと思いつつ、やめる勇気もなく終身雇用の流れに乗っていました。キャリアアップなどを理由に転職する時代です。私は、柔道経験があったこともあり柔道部の顧問を長くしていました。転任した際は、校長に直訴し創部することもありました。指導者として北信越、全国大会に多くの選手を出場させることができ、後の五輪王者などと練習試合や全国大会で対戦することもありました。また、県専門委員長として、大会運営にも携わり、優秀な指導者や五輪メダリストとも知り合いになり、指導法など様々なことを学ぶことができました。中学校の部活動は、地域クラブ展開で中体連は変革の時期にあります。学級経営や生徒指導においては、平日休日問わず、先輩教員に相談したり愚痴をこぼしたりしながら遅くまで学校に残っていました。そのような中で教員としての様々なノウハウや実践力を身につけたと思います。研究においても、研究会に所属し、授業研究や教材開発など何の制限もなく参加させてもらいました。

このように、学校取り巻く環境は、約40年で大きく変化しています。これからの校長は、常に最新の情報を取り入れ、これらの変化に対応した経営力や組織マネジメント力などの専門性を発揮しなければなりません。教職経験を生かしながら広い視野に立った素養が求められると思います。約40年前、初任者研修で、「不易流行」について講義がありました。改めて調べてみると不易流行とは、松尾芭蕉の言葉で「変化しない本質的なものを大切にしつつ、新しいものを積極的に取り入れていくこと」という意味です。教員は、「もの」相手ではなく、「ひと」相手の仕事であって、サラリーマン先生になってはならないと感じます。業務改善は必要ですが、人間相手だからこそ使命感や教育的愛情をもって仕事をしてほしいと思います。子供は、先生を選ぶことはできません。この先生に教わって良かったと思えるように努力しなければなりません。私は、人間相手だったからこそ教職に身を置くことができたのではないかと思います。

最後に、最近、いろいろなところで教え子に声をかけられることが多くあります。教え子の成長した姿を見ることができることが、何よりの幸せだと感じています。人間(子供)相手だったからこそ60歳まで続けてこれたと思います。

「語り合う」ことに支えられて

〈福井市〉社北小学校長
水 野 涼 子

私は、「語り合うこと」を大切にしてきました。教職員や保護者の方々と語り合う中で、納得解を見いだしたり思いや背景を理解したりしたとき、喜びを感じてきました。一方で、「校長」という立場で語ることで、知らず知らずのうちに自分の正義を振りかざしてはいなかったかとも思います。正義は、結局その人なりの「正しさ」にすぎないと思うからです。

教育は、多様な価値観が重なり合う場で営まれるものであり、異なる声を聴き合い、葛藤しながら共に歩む営みそのものにあると私は考えています。教師・保護者・行政など、立場や経験によって、それぞれが異なる「正しさ」を抱えています。そうした多様な考えや声に対し、決裁権を片手に「語り合い」の可能性を閉ざしはしなかったか、違和感や反対意見を受け止め、課題を問い直す機会を逃してはなかったか、多くの顔を思い浮かべて自問しています。

では、真の「語り合い」のために、どう語ればよかったのか、私の考えを記しておきたいと思います。

まず、「語る前に自分を問い直すこと」です。自分の正しさのバイアスに向き合い、誰かを過度に擁護していないか、逆に誰かの声を消していないかを常に確かめつつ、真の課題を見失わないことです。

次に、「違和感を歓迎する姿勢を示すこと」です。異論が出たとき、それを「攻撃」としてではなく「対話の入り口」として受け止め、安心して意見を述べられる雰囲気や年長者こそつくりたいです。「正しさ」よりも「関係性」を大事にすることからしか始まらないと私は思います。「共に」悩み、学ぶ姿勢を示し、信頼関係を築く中で「語り合うこと」が無数の可能性を引き出すと考えています。

そして、「語り合う仲間をもつこと」もよいと思います。信頼できる仲間と語り合う中で、考えの偏りに気付かされることがあります。私は幸い、幅広い年齢層、多様な立場の仲間にも恵まれました。放課後の校長室、休日のお茶会、夜中の友達とのLINE、日々の家族との会話など、多くのやりとりを通してたくさんの気付きを得ることができました。

最後に、「余白を残すこと」です。結論や主張で「正しさ」を一方向的に示すのではなく、自分も相手も考え続けられる「問い」を残せたら…と思います。

こうして振り返ると、私が長く教職人生を歩み、校長として務めることができたのも、「語り合うこと」の大切さに導かれ、共に教育観を紡いでくれた仲間のおかげです。これからも、感謝の気持ちを忘れず、語り合える輪を広げたいと思っています。

感謝のリレー

〈大野市〉小山小学校長
廣瀬 智之

『中堅教諭の頃の私は、自分が管理職になるなんて夢にも思わなかった。その頃は、部活動に夢中で「チームを強くしたい」「子どもと一緒に汗を流したい」という一心で働いていた。』～全連小教育研究シリーズ第62集 本人寄稿文より引用～

というように、若い頃の私は、管理職を目指すことはありませんでした。“生涯担任”として、58歳で中学1年生を担任し、持ち上がりの学級を3年間担任して、60歳定年の年に一緒に卒業することを妄想していたほどです(笑)。ただ、学年主任や生徒指導主事を任せられ、俯瞰したものの見方を求められてからは、成果や結果を求めるという考え方より「人を育てる」という考え方に変わりました。その後、管理職試験を受けることになりました。

教頭時代。雑務の中、ある校長からある言葉を聞くこととなります。「俺は、校長になるために教頭になったんや！」私には、まさに“目からウロコ”の言葉でした。私の校長の気概の源泉がこの言葉にあります。校長になった今も、時折その言葉が頭をよぎります。「この時、校長は何をする？」常に自問してきました。そして、管理職になるときに誓った「人を育てる」という信条も、今も変わりはありません。

小山小学校は、統合前の最終年度を迎えました。今年度「150プロジェクト」と銘打って、職員一同カリキュラムを工夫して、そのプロジェクトに取り組んでいます。昨年度末に「来年度は最後の年と開校150年が重なる年だけど、何もしないという選択肢はないと思うのだけれど…、どうだろう？」と問いを投げかけたところ「150%賛成です。」という答えが職員から返ってきました。職員の頼もしさに目を細めるとともに、心の通い合いを感じた瞬間でもありました。今は、その取組を通して、なんだか子どもも職員も楽しそうです。

社会や時代の変化により、教育に求められるものも次々と変わっていきませんが「人を育てる」ことは、変わらず求められるものではないかと思っています。

思い起こせば、児童生徒、保護者、関係諸機関の方々も含め、これまでたくさんの人と出会い、たくさんのことを学んできました。今の自分があるのは、今まで出会った全ての人のお陰だと言っても過言ではありません。私の教員生活のどこを切り取っても至福のときでした。本当に感謝の念に堪えません。

今後、この感謝の気持ちをこれから出会う人に「感謝のリレー」として、伝えていけたらと思います。ありがとうございました。

CAIからGIGAへ ―初心にかえる―

〈鯖江市〉吉川小学校長
坂本 修一

今年で役職定年迎える今、時折、実になんとも言えない不思議な気持ちになることがあります。何をしても校長としては「最後の」という言葉が付くので、寂しく、それでいてほっとする……。そして、来年度からは再び教諭としての生活が始まるので、不安であり、それでいて楽しみな……。そんなときは、新採用の頃がよく思い返されます。

私の教員としての歩みは、当時1000人を超える生徒が在籍する中学校からスタートしました。初めての指導主事訪問を前に指導案を出したところ、校長室に呼ばれ、「手書きの文字はいいね。その人柄が表れる。」と褒められたのも束の間、「でも、時代はパソコンだよ。直すついでに、指導案自体も下書き10枚を3枚ぐらいにまとめ、作り直しなさい。」と優しくご指示を受けました。こうして、PCとの付き合いが始まりました。

その校長先生は、学校経営に新たな手法をいくつも取り入れ、CAI(Computer Assisted Instruction)と呼ばれるコンピュータ支援学習もその中の一つでした。当時としては先駆けでしたので、たった1時間の授業のために、何十時間という準備・労力を必要としました。ですから、研究発表の度に、先輩方とともに何週間も前から深夜まで残業でした。まさに、ブラックを越え漆黑です。

しかし、不思議と今は「楽しかった」という思い出になっています。「思い出は美化される」ことも一因だと思いますが、それよりも、多くの先輩方と一緒に取り組めたことで得られたたくさんのスキルや学びが、教員としての基盤・その後の教員人生の糧となったからです。PCが自分にとってより身近なものになり、ある程度のスキルを身につけることができましたが、それよりも、事前に行った綿密な教材研究やPCのプログラムを含めた授業デザインのやり方・考え方は、かけがえのない宝となりました。

そして今、「NEXT GIGA」。コロナ禍を機に、これまで以上の急激な変化により、授業でのICT機器やアプリ利用はもはや常識となりました。残念ながら今の自分には、利活用に必要なスキルが不足しています。しかし、それは手段であり、そのうち身につけていくつもりです。それより、指導や授業設計の根幹は昔も今もそれほど大きな違いはないと思っていますし、自分なりにアップデートしてきましたので、それを生かしたいと考えています。

「初心にかえる」。来年度からは、また新たな立場での仕事に励むこととなります。どのような職務であっても、教員として常に学び続ける姿勢を持って臨みたいと思います。

感謝を胸に 新たな一歩を

〈敦賀市〉栗野小学校長
山 岸 美 穂

平成元年、まだ校内暴力の影を色濃く残していた時代に、私の教員人生は幕を開けました。小学校の教師を志していた私が配属されたのは、思いがけず大規模中学校。場違いな世界に紛れ込んでしまったような不安や戸惑いの日々。しかし、中学生がもつ感性の豊かさ、心の純真さ、仲間と心をつなげたときに生まれる圧倒的なエネルギーに心を動かされ、いつしか「中学校教師こそ我が天職」と感じるようになっていきました。

「生涯一教師」—そう思っていた私の歩みを転じさせたのは、ある校長との出会いです。現場一筋で生きてきた自分に管理職が務まるのか…そんな葛藤を抱えながらも、新たな一歩を踏み出しました。

振り返れば、教員生活のスタートも、管理職としてのスタートも、私にとっての「始まり」は、いつも思いがけない挑戦からでした。しかし、その挑戦の先には、必ず大きな学びと成長がありました。挑戦することを恐れない—それが、私が教職人生を通して学んできた最も大切なことです。

教職員一人ひとりがそれぞれの持ち場で力を尽くし、互いの仕事を理解し、尊重し合うことで、学校は初めて組織としての力を発揮できます。校長は組織の中の一つの役割にすぎませんが、その責任は極めて重いものです。学校全体のみならず、地域社会の中の学校を見据える広い視野、状況を見極めてよりよい判断をする力、そして、学校を守り抜く強い覚悟が求められます。

私は、子どもたちや教職員を温かく包み込む「学校の母」のような校長でありたいと願い、働きやすく、働き甲斐のある職場づくりに努めてきました。包容力をもって、一人ひとりが安心して力を発揮できる学校をつくる—それが私の目標でした。その理想にどこまで近づくことができたのかは分かりませんが、子どもたちと先生方が生き生きと活動する姿を見るたびに、大きな喜びが込み上げてきます。

今、人生の一つの節目を迎え、改めて思うのは、私が歩んできたのは「人づくり」であると同時に「自分づくり」の道でもあったということです。喜びもあれば、悩み苦しむことも多かった37年間。共に歩んでくれた子どもたちや先生方、そして、支えてくださった多くの方々のおかげで、ここまで歩み続けることができました。私一人では到底たどり着けなかった道程です。深く感謝申し上げます。校長としての日々は、重い責任と引き換えに、深い信頼とやりがいで結ばれた、かけがえのない時間でした。

人生百年時代。退任は終わりではなく、新たな出発点です。これまでの経験を糧に、自分らしい挑戦を重ね、学び続ける人生を歩んでいきたいと思っています。

役職定年を迎えて

〈おおい町〉本郷小学校長
岸 崎 浩 明

これまで多くの学校で子どもたちと関わらせていただきましたが、本校は私が最も長く勤務した学校であり、数えきれないほどの思い出とともに、深い愛着を感じています。この学校で校長職を退くこととなりました。多くの方々の支えをいただきながら、子どもたちとともに歩む日々を送ることができました。心より感謝したいと思います。

振り返ってみると、年月を重ねる中で、かつて担任として関わった子どもたちが大人になり、今では保護者として我が子を本校に送り出してくださっている—そんな光景に出会えることは、この上ない喜びです。親となった彼らと、当時の思い出を笑いながら語り合えること、気さくに言葉を交わせることは、私にとってとても幸せな時間でした。そして何より、成長した彼らが立派に社会の一員として歩んでいる姿を目にするたびに、教員という仕事でしか味わうことができないであろう喜びを感じます。

教員としての歩みの中で、社会教育主事として過ごした3年間は、私にとって大きな転機となる貴重な経験でした。学校という現場から一歩離れ、外の視点から教育や学校を見つめ直すことで、学校の良さ、そして改善すべき点を客観的に捉えることができた時間でもありました。その中で築かれた人とのつながりは、私のその後の教育活動において、何度も私を支えてくれる大きな力となりました。さまざまな立場の方々と交流し、学び合えたことは、私にとって何にも代えがたい財産です。

教育現場には今、多くの課題が横たわっています。とりわけ近年、教職を志す若者の減少という現実、深い憂慮の念を抱いております。教職は、子どもたちの成長に直接関わり、その未来に影響を与える大変責任ある仕事であると同時に、大きなやりがいと感動に満ちた職業でもあります。

今年度も3名の学生が本校で教育実習を行い、子どもたちと真剣に向き合いながら、日々奮闘していました。その姿を見て、改めて「教員という職業の魅力」が次代に受け継がれていくことの大切さを感じました。そして何より、子どもたちが教師を「将来なりたい職業」として憧れを抱けるような存在であるべきだと、強く思われました。未来を担う子どもたちの前に立つ私たち大人が、誇りと使命感をもって日々の教育活動にあたるのが、教職の魅力を取り戻す第一歩だと信じています。

最後になりますが、これまでご支援くださった皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

校長講話

『みんなが主役』の学校に

〈あわら市〉本荘小学校長
林 小百合

1年のスタートにあたり、本荘っ子として身に付けたい4つの力と今年度のスローガンについて話します。

身に付けたい力の一つ目は、「自分から挨拶ができ、返事ができる」力です。挨拶は、他の人とつながるための魔法の言葉です。私は毎朝、児童玄関で皆さんと挨拶を交わしています。最近、私と一緒に並んで挨拶をする子、自分から進んで挨拶をする子が増えつつありとてもうれしいです。自分から挨拶ができることは、とてもすばらしいことです。また、名前を呼ばれたとき大きな声で堂々と「はい」と返事ができることも、皆さんが大人になる上でとても大切なことです。どうか、自ら進んで挨拶ができる力と返事ができる力を身に付けましょう。

二つ目は、「人を大切にできる」力です。大切にする方法はたくさんあります。相手の話をしっかり聴くこと、相手の気持ちに共感すること、他者と協力すること、人のよさを見ること、そして、人それぞれの違いを認めることも他者を大切にすることにつながっています。皆さん一人一人は、かけがえのない大切な存在です。周りの人を大切にできる力を身に付けましょう。

三つ目は、「自分の気持ちや考えを他者とキャッチボールできる」力です。授業中は、自分の考えを友達やみんなに自信を持って伝えましょう。それを聴く人は「なるほど。」としっかりと受けとめましょう。対話のキャッチボールで互いの考えをさらに深めていってほしいと思います。もし友達とうまくいかなかったり、けんかをしてしまったりしたときにも、自分の気持ちを相手に言葉で伝え、話し合いで解決できる力を身に付けましょう。

最後に、「自分から動く」力です。周りを見て動く、人の気持ちを考えて動く、自分の頭で今、何をすべきかを考えて動くということです。自分の苦手なところを自主学习で復習する、元気のない様子の友達に声をかける、汚れているところを見つけて掃除することも当てはまります。自分や周りの状況を見つめ、友達の気持ちを感じて、行動できる力を身に付けましょう。皆さんには、4つの力を身に付け、さらに立派に成長していってほしいと願っています。時には、新しいことや苦手なことにも勇気をもって挑戦しましょう。本荘っ子全員が笑顔で、楽しい学校生活を送ることができる学校、全員に出番や活躍の場がある学校を目指して、今年度のスローガンを『みんなが主役』としました。

学校は、皆さんのためのものです。皆さんの「やりたい」「したい」という願いや念いを大切に、みんなのための魅力ある学校を、全員の力で作っていきましょう。『みんなが主役』、今日からスタートです。

人権週間を前に

〈坂井市〉春江西小学校長
中 谷 滋

最初に、保育園の頃におそらくやったことのあるだろう手遊びをみなさんでやってみましょう。

♪「グーチョコキパーで、グーチョコキパーで、何作ろう？何作ろう？右手はグーで、左手はチョコキで、かたつむり、かたつむり。」♪

さて、みなさんは今上手に指を動かしながら手遊びをすることができましたが、もし君たちの手の指がなかったらどう思いますか。いやだな、とか、困る、という人がほとんどではないでしょうか。でも私たちの身の回りには、指がない、足が不自由で歩くことができない、目が見えないなど、生まれながらにして障がいをもっている人たち、または生まれた後に病気やけが、事故で障がいをもつことになった人たちがたくさんいるのです。

今日は今から、生まれたときから指がない状態で生まれてきた女の子のお話をきいてもらおうと思います。絵本のタイトルは、「さっちゃん
のまほうの手」です。

「さっちゃん
のまほうの手」(偕成社)
たばたせいいち 先天性四肢障害児
父母の会 のべあきこ しざわさよ
こ 共同制作



聞いてみてどうでしたか。障がいをもっている他の子たちと同じように生活しているさっちゃん、指のない手を、「不思議な力をくれるまほうの手」と言ったさっちゃんのお父さん。その言葉でさっちゃんはつらい現実を乗り越えようとします。言葉は不思議な力を持っていて、「まほうの手」と言ってその言葉を常に口にするので、さっちゃんもお友達も考えがポジティブに変わっていきました。きっとこの後、さっちゃんは他の子と同じように毎日を送っていくことでしょう。

2学期の始業式の時に、岐阜県の高校野球のY選手のお話をしました。指がなくても甲子園に出場し大活躍する人もいます。おそらくY選手は障がいをもっている、血のにじむような大変な努力をしたのでしょうけれどもね。

障がいをもっている人たちももっていない人たちも、みんな私たちと同じように考え、同じように生活しています。ですから困っているときにはお手伝いしてあげてほしいですし、普段は他の人と同じように接し、同じように生活してください。それが障がいをもっている人たちの願いだと思うからです。

全ての人々が同じように生活できる社会であるといいですね。

「毎日がニュース！」 —国高小学校のホームページ発信

〈越前市〉国高小学校長
小林 英典

かつては、学校だよりや学年通信を通して保護者や地域の方々に学校の様子をお伝えしていましたが、現在ではホームページがその中心的な役割を果たしています。国高小学校でも、ホームページを「学校の顔」と位置づけ、日々の教育活動や児童の生き生きとした姿を積極的に発信しています。

国高小学校のホームページでは、体育大会や学習発表会などの行事だけでなく、日常の授業風景や休み時間の子どもたちの様子、地域の方々との交流活動など、学校生活のあらゆる場面を取り上げています。写真とともに短い記事を掲載することで、保護者や地域の方々に「学校の今」を感じ取っていただけるよう努めています。

こうした取組を続けた結果、昨年度は掲載記事数が年間1000本を超えました。ほぼ毎日複数の記事を掲載した計算になります。これに対し、保護者からは「子どもがどんな学校生活を送っているのかが分かり、安心できる」「学校の雰囲気が伝わってうれしい」といった声を多くいただきました。また、地域の方々からも「学校の頑張りがよく分かる」「行事だけでなく日常の様子も知ることができるのが良い」と好評をいただいています。

学校は地域に支えられて存在しています。だからこそ、学校での取組や子どもたちの成長を、地域に開かれた形で発信することが大切です。ホームページは、学校と地域を結ぶ大切な「窓」であり、信頼と理解を深める「架け橋」でもあります。特に最近では、スマートフォンから気軽に閲覧できるようになったことで、家庭でも子どもの話題が広がり、保護者と子どもの会話のきっかけにもなっています。

今年度は、年間1200本の記事掲載を目標としています。単に数を追うのではなく、子どもたちの成長の瞬間を丁寧に切り取り、保護者や地域の方々に「国高小の温かさ」が伝わるよう心がけています。そのためには、教職員一人一人が発信者としての意識をもち、日常の小さな出来事にも教育的な意味や価値を見いだしていく姿勢が欠かせません。

子どもたちは毎日、新しい発見や挑戦を積み重ねています。その瞬間を逃さず伝えることは、子どもたち自身の自己肯定感を高めることにもつながります。これからも、子どもたちの輝く姿を伝えるとともに、地域に開かれた学校づくりを進めていきたいと思えます。

最後に、ホームページは、単なる情報提供の手段ではなく、教育の質を高め、地域とともに歩むための重要なツールになりうると考え、今後も「毎日がニュース！」を合言葉に、子どもたちの今を発信し続け、未来につながる国高小学校を目指していきます。

大阪・関西万博

〈若狭町〉気山小学校長
三宅 育代

4月13日に始まった「大阪・関西万博」。先日、3年生から6年生のみなさんと一緒に行ってきました。今日は「万博」のお話をします。

みなさん、万博ってなんだと思いますか？6年生がしおりに上手にまとめてくれました。

「世界の国が集まって、未来のくらしやびっくりする発明を見るイベントだよ！」「テーマは『いのち輝く未来のデザイン』。みんなが元気に生きる未来を考えることだよ！」まさにそのとおりですね。

行った日は本当に人が多くてびっくりしましたね。実はその日の来場者は万博期間中で一番多かったそうです。人の波の中を歩くだけでも大変でしたね。それでも「国連パビリオン」に入ることができました。とても貴重な体験でしたね。

国連パビリオンでは、世界の国々が協力して「地球をよりよい場所にしよう」と取り組んでいることを学びました。そこでは「SDGs(持続可能な開発目標)」という、2030年までに達成をめざす17の目標が紹介されていました。貧困をなくすこと、環境を守ること、すべての人が安心してくらす社会をつくること・・・とても大きな課題ですが、世界中の人たちが力を合わせて頑張っています。その姿を見て、みなさんも「自分にも未来のためにできることがある」と感じたのではないのでしょうか。

そして印象的だったのが「大屋根リング」。世界で一番大きな木の屋根で、まん丸の形をしています。どうして丸い形なのでしょう。それは「みんなをつなぐため」です。丸は友だちと手をつないでできる“わ”です。大屋根リングは、人と人、国と国、そして今の私たちと未来の人たちをつなぐ“わ”のしるしです。この屋根には日本中の森の木が使われています。「自然を大切に」「地球にやさしい未来を」という願いが込められています。リングの下は人々が集い、語り、世界の文化を楽しむ“出会いの場所”。まさに「いのち」「つながり」「未来」を表しています。

人が多くて大変な中でも、たくさんの学びと発見がありました。感想に「行ってよかった」「大人になってから自慢したい」と書いていた人もいましたね。それほど価値のある経験になったのですね。

1・2年生のみなさんも、行った人に話を聞いたり、テレビで見たりして、万博のすばらしさを感じてください。そして今回の経験を思い出にするだけでなく、「未来をよりよくするために、自分にできることを考える機会」として、これからの毎日に、そして皆さんの未来に生かしていきましょう。

令和7年度 専門委員会活動報告

人事行財政対策委員会

本委員会では、学校教育・学校経営の課題解決に向けて、小・中学校が一体となって教育諸条件の整備充実のため、学校現場と行政側が意思の疎通を図ることを目的として、「ふくい教育ミライ会議（小中学校長会）」を実施した。4月に「第4期福井県教育振興基本計画」が発行されたことを受けて、基本計画にある「方針1～4」に係る具体的な取り組みや要望について県下の小中学校長からの声を集約し、当日の話題提供原稿を作成した。当日は、その話題について協議をした。

■ふくい教育ミライ会議（小中学校長会）8/28（木）

本会議は、県教委から藤丸教育長をはじめ副部長、学校教育監、各課課長等10名、県小中学校長会から15名が参加した。校長会から「福井教育振興基本計画」の「方針1～4」について下記の内容について話題提供し、それぞれについてフリートークの時間を取った。

- 「方針1 自らと福井の将来につなげる学びの推進」
 - ・ふるさと学習、デジタル技術の活用について
- 「方針2 誰一人取り残されず、個性が尊重される学びの推進」
 - ・校内サポートルームの拡充、特別支援教育の充実について
- 「方針3 人生を楽しく豊かにする学びの推進」
 - ・放課後や休日の児童生徒の居場所づくり、中学校部活動の地域展開について
- 「方針4 基本となる環境づくり」
 - ・教職員の働きがいや教職の魅力向上、働き方改革の推進について

校長会からの話題提供では、学校現場の取り組みや課題、要望などを具体的に伝えることができた。今回は8～9人ずつの3グループに分かれてフリートークの時間を多く取る会議になった。また、教育長、副部長、学校教育監がファシリテーターとなり、各学校の状況や課題について掘り下げて協議することができた。また、教育長の総括は、学校現場の困りごとに真摯に向き合い、前向きに検討を進めていく内容であった。

昨年の口の字型の配席と比べ、今回は少人数での話し合いの形になったことで、より具体的に深まりのある会議になった。2年続けて担当し、行政側と現場が直接意見交換できる場の必要性を改めて実感している。

（文責：福井市六条小学校長 藤木 隆之）

調査研究委員会

調査研究委員会では、『子どもが主役の「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育を推進するための校長の役割』をテーマに、今日的な学校教育の課題、学校運営上の諸問題や社会の変化に即応した学校の取組について、調査研究を行った。

- 1 調査対象 全小学校181校
（国立1校・市町立180校）
- 2 調査期間 令和7年6月1日～6月19日
- 3 調査項目 全連小調査項目の抜粋と会員からの要望
- 4 調査内容 報告書を参照（県小学校長会HPに掲載）

調査の結果、新学習指導要領の完全実施から6年目を迎えたが、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が継続して最重要課題となっている。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるため、これまでも各学校でICT等を活用しながら創意工夫して授業改善に取り組み、一定の成果をあげてきているが、さらなる改善と進展が求められている。

また、「特別支援・インクルーシブ教育の構築」を引き続き重要な課題であると捉えられている。教員の専門性については、「障害のある児童の心理や特性の理解」が最も高く、次いで「児童のニーズに応じた支援・指導」「校内での支援体制作り」の順になった。特に3つ目の「支援体制づくり」は全国では16%と低いですが、本県では6割を越えた回答となった。本県が特別支援教育をチームとして推進することを重要視していることが分かる。特別支援教育や個別の支援を必要とする児童は年々増加しており、インクルーシブ教育の理念としてどの子どもにも育つことを目指して、全教職員が特別支援教育の専門性を高め、通級や支援員、SCやSSW、関係機関や医療機関との連携など、人的配置を充実させることが求められている。

小学校教育の改善・充実のために若手教員の割合が増している現場の工夫として、「チーム担任制」について調査活動をして欲しいとの要望を受け、回答を得た。2学級を3人でローテーションといった、理想的な形ではないにしてもそれに準じた形で特定の学年で行っているなどの報告があった。若手や中堅教員が互いに学び会えるメンターチームの構築としても効果が期待できる。

その他、本調査報告書では、いじめや不登校の予防・支援、ふるさと教育の推進など、学校運営上の課題について分析・考察している。本報告書が、各校長の現状認識の一層の深化につながり、各学校運営改善の一助になればと思う。最後に、アンケートに協力いただいた県下小学校長をはじめ、調査研究委員の皆様に、心より感謝申し上げます。

（文責：福井市東藤島小学校長 角南 達三）

教育研究委員会

1 活動報告

第77回福井県小学校長教育研究南越大会に向けて、研究副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定し、校長の役割や指導等の在り方について実践的な研究を推進した。参集型の研究大会を開催し、意見や感想を直接交換できる貴重な機会となった。

2 主な活動内容

(1) 第1回教育研究専門委員会

- 期日：4月17日(木) 会場：ユー・アイふくい
 ○役員選出、年間活動方針、年間行事計画等について
 ○令和7年度・8年度各研究大会について
 ○県小学校長教育研究南越大会の概要について

(2) 第2回教育研究専門委員会

- 期日：6月17日(火) メールでの資料配付
 ○県小学校長教育研究南越大会の全体会、分科会の日程と当日の協力体制確認

(3) 第77回福井県小学校長教育研究南越大会

- 期日：8月20日(水)
 会場：市民プラザたけふ

【分科会発表者】

- | | | | |
|---------|----------|-------|----|
| ①学校経営 | 越前町立宮崎小 | 山野裕子 | 校長 |
| ②知性・創造性 | 福井市和田小 | 嶋本享恵 | 校長 |
| ③人間性・健康 | あわら市北潟小 | 田中月子 | 校長 |
| ④人材育成 | 福井市足羽小 | 高寄真輔 | 校長 |
| ⑤危機管理 | おおい町立大島小 | 時岡純子 | 校長 |
| ⑥社会形成能力 | 南越前町立今庄小 | 中村和弘 | 校長 |
| ⑦自立と共生 | 大野市下庄小 | 下口真砂代 | 校長 |
| ⑧連携・協働 | 敦賀市立粟野南小 | 北川佳邦 | 校長 |

(4) 第60回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究三重大会

- 期日：10月9日(木) 10日(金)

【分科会発表者】

- 第1分科会 越前町立宮崎小 山野裕子 校長
 第12分科会 大野市下庄小 下口真砂代 校長

(5) 第3回教育研究専門委員会

- 期日：2月上旬 メールでの資料配付
 ○第77回県小学校長教育研究南越大会の反省
 ○第62回東陸大会(R9)、第78回全連小大会(R8)
 (文責：越前市北新庄小学校長 松村 典子)

編集広報委員会

1 活動報告

「會報」を編集・発行し、県小学校長会及び各専門委員会の活動内容、令和7年度の県小学校長会の主な歩みを全課員に知らせた。また、各会の先輩諸氏の提言を受けて、校長としての指導力向上や今日的課題の把握に資するとともに、会員相互の意見交換の場を提供する情報連絡誌としての役割を果たした。

また、全連小とのつながりから、「小学校時報」および「教育研究シリーズ」「教育研究便覧」の執筆にかかる調整や原稿依頼、執筆等を行った。全連小ホームページ「特色あるR7年度学校」掲載校の確認、調整、決定を行った。

2 主な活動内容

(1) 「會報」の編集・発行(A4判、年2回発行)

①第121号の主な内容

巻頭言、県小学校長学校運営研究大会坂井大会祝辞、県小学校長会の活動方針、各専門委員会活動計画、校長講話、新任校長の抱負

②第122号の主な内容

巻頭言、県小学校長研究大会祝辞、時流潮流、役職定年校長の言葉、各専門委員会活動報告他

(2) 編集広報委員会

- 第1回編集広報委員会 4/17 ユーアイふくい
 ○第1回編集企画会議 7/10 福井市東安居小学校
 ○第2回編集広報委員会 8/6 オンライン
 ○第2回編集企画会議 12/11 オンライン
 ○第3回編集広報委員会 12/17 オンライン

(3) 全連小広報担当者連絡協議会 6/30 東京

(4) 全連小「小学校時報」等の原稿依頼、編集等

- 「小学校時報」掲載
 ・5月号 鯖江市神明小 木村 雄一 校長
 ・8月号 おおい町立名田庄小 吉田 尚子 校長
 ・11月号 美浜町立美浜中央小 川畑 成央 校長
 ・12月号 福井市中藤小 勝木 孝一 校長
 ・2月号 福井市西藤島小 石丸真由美 校長

○「教育研究シリーズ」

- ・【提言】 福井市中藤小 勝木 孝一 校長

○全連小ホームページ

「特色ある学校紹介」R6年度～掲載校

麻生津小、村岡小、明章小、惜陰小、南条小、松原小、大島小

- 全連小「特色ある研究校便覧」R8・9年度掲載校
 志比南小、春江東小、中央小、和泉小

(5) 県小学校長会HP更新(7月、12月、2月)

(6) 依頼原稿の調整・編集(随時)

(文責：福井市東安居小学校長 林 秀昭)

編集後記

この度、「會報」122号発行に際して、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館館長 湯川直様には、お忙しい中にも関わらず、素敵な原稿を執筆していただきました。関係の皆様、会員の皆様からも、経験に基づいた貴重な原稿をお寄せいただき、今号も充実した内容となりましたこと、心より厚くお礼申し上げます。「會報」やホームページが、学校運営の充実の一助となりましたら幸いです。

